



10/20/01

10/20/01

それぞれの宴

澤野久雄



新潮社版

それぞれの宴 うたげ

一九七三年二月五日印刷
一九七三年二月十日発行

著者 さわの ひさお 澤野久雄

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 東京 (03) 二六〇—一一一一

振替 東京 八〇八

二光印刷、植木製本

定価 八五〇円



© 1973 Hisao Sawano
Printed in Japan

乱丁、落丁本はお取替えます。

それぞれの宴
目次

虚	古	迷	湖	遁	漂	夜
	い		・ 80			の
実	傷	路		世	泊	客
・ 151	・ 126	・ 105		・ 56	・ 31	・ 7

終		明	小	一	帰	旅	常識
章	それぞれの檻	暗	さな罪	つの宴	ってきた女	愁	の背景
・ 347	・ 328	・ 304	・ 279	・ 254	・ 230	・ 199	・ 177

装画・織田広喜

それぞれの宴

夜の客

古い、ビルである。見るからに、古めかしいビルであった。八階建の建物の、階段は石で出来ていた。手すりも、石であった。そして手すりとは反対側に続く壁も、裾の方一メートルほどは、同じ滑らかな暗緑色の石が張りつめられていた。

冬の夜のこのビルでは、そういう石の芯から、冷えが立ち登って来るようである。

葛一人は、事務所の重い扉を押した。階段が冷たかったから、暖房のある部屋の中は、ぽうっとするように暖かい。「お帰りなさい」

デスクに向っている何人かが、声を合せるようにしてそう言つて、

「外は、お寒かったでしょ？」

秘書の西脇順子が、敏捷に椅子を立てて来た。

「あら、お濡れになりましたのね」

「うむ。すぐ近くだったからね。歩いた。そしたらみぞれが降つて来た。雨とちがうよ」

「あら、雪になるんでしょうか。素敵だわ」

東京という都会では、ひと冬に何度も雪が見られない。だから東京の人は、元来、雪というものに、漠然としたあこがれを抱いているのである。

——この娘も、まるで子供のように……。

と思つた途端に、

「高井さんはいいわ。雪の夜の結婚式ね」

仕事机に向つてゐる、一人の女が言つたから、

「ああ、そうか。今夜は高井君の……」

「やっぱり、忘れていらした」

「いや、忘れちゃいない」

三年ほどこの事務所で働いてゐた娘が、つい二週間ほど前、結婚するからと言つて退職した。そして今夜が、その結婚式なのである。披露宴が六時から、東京タワーに近いホテルの広間で、開かれることになっている。そして、この事務所に働く人たちの総てが、——といつても所長以下、僅か九人にすぎないのだが、——招待されることになつてゐた。

西脇順子は、葛のオーヴァを手早くハンガーにかけて、壁に吊した。それからハンケチで、オーヴァの毛足にとまつてゐる僅かな雨滴を払いながら、

「所長さん、お客様がお待ちでいらっしゃいます」

「客が……？」

葛は真顔になつて、自分の席へ近づいた。デスクへ、視線をおとす。やや大ぶりの名刺が、どちらにも曲らず、几

帳面に置かれていた。しかし、そこに印刷されている「相沢練司」という名前は、ふと、親しいもののようにでいて、実は急には思い当らなかった。

「先日、お目にかかった、と言っておられました。中学校のクラス会とかで……」

「ああ、そうか」

それだから親しい気がしたんだ、と彼は思った。しかし目にうかび上って来る二十何人かの男たちの中で、どれが果して相沢の顔なのか、葛には一瞬、判別がつかなかった。「君たち、僕が遅くなりそうだったら、先に会場へ行けよ」

彼はデスクに向っている人たちにそう言うておいて、応接間へつづく扉を押した。そして、

「やあ、君か……」

と、言った。

三坪ほどの細長い応接間の、窓よりに細長い卓子が一つ置かれていた。その向うの長椅子にかけている男の、左頬から顎にかけて、鋭い傷痕が走っている。笑うと、その傷痕がゆがんだ。

「通りかかったから寄ってみたが、暮で、忙しいんじゃないかな」

「うや、まあさ」

いくら忙しかったって、昔なじみの君を追い返すわけには行かない、と言おうとしたが、葛は客に対して「昔なじ

み」というような親しみを抱いていたわけではない。

二十年来、葛は古いつながりというものを、拒否して暮して来た。それは親戚に対しても、友達に対しても、そうだった。だから、学生時代の同窓会とかクラス会とかいうものにも、むしろ反感を感じていた男だ。それが十一月の中ごろ、初めて中学校のクラス会に出た。そして、久しぶりに二十何人かの古い級友たちに会った。

友達の中には、一目で誰それと分るなつかしい顔もあった。しかし、どう考えても、思い出せない者が、出席者の四分の一ほどはいた。それは、無理もないことだった。別れ別れになって、三十年を越えているのだ。その間には、あの怖しい戦争があった。それぞれの上に、予期しない運命が、開かれたり閉じたりしたことであろう。思いがけなく、進む道が曲げられる。かつては言葉通り「紅顔の美少年」だった者が、六十すぎの老人に見えるほど、衰え切っていたりした。中学生時代には決して目立たなかった少年が、今では颯爽たる紳士になっていたりもする。その変りようが余りに激しかったから、自己紹介の挨拶を聞いてはじめて、

「やあ、お前か……」

というような声の立つこともあった。

まして、彼等の中学校では、年ごとにクラスの編成替えが行われた。すると旧制五年間の中学生生活を通じて、毎年、同じクラスに置かれた者もあるかわりに、一度も同じ

クラスにならなかつた相手もあるのである。するとその夜の集まりは、クラス会というよりは、同期生の会と呼んだ方が正しいわけである。

葛と相沢とは、一度も同じクラスになつたことがない。すると当然、記憶は薄いわけだつた。その上、相沢という男はどういうわけか、頬から頸にかけて、深い傷痕を残している。血氣さかんな青年時代の遺物だそうだが、その顔の印象は、少年時代とはすっかり変つたものになつてゐるにちがいない。

クラス会の席で、葛が相沢を思い出せなかつたのも、無理はなかつた。しかし相手は、葛のことをよく知つていて、「覚えていどころか、戦後になつても、よく君の消息は聞いたものだ」

そう言つて妙な笑ひ方をするから、葛はひそかに、相手をさける姿勢をとつた。

どことなく、不気味な男なのである。えたいの知れないところがある。大体、なにをして食つてゐる男なのか。クラス会の時、出席者はそれぞれに自己紹介をしたものだが、顔にも見覚えのないような男が、果してどんなことを喋つたか、葛の記憶には残つていなかった。

——俺には、こんな奴につかまれるような尻尾もないから……。

と、胸の中で苦笑しながら、「それにしても、思いがけないお客さんだつた」

「招かれざる客、か」

「とんでもない。僕には懐かしい客さ。何しろ僕はもう永いこと、旧い友達というものに会つたことがなかつた。会うのは、その時その時に取引きのある相手だけだ。この間のクラス会でみんなに会えて、なんだか生き返つたような気がしたものだ」

「生き返る」とは、誇張しすぎた表現かもしれない。しかし少くとも、今まで塗りこめられていた壁に、窓が一つあいたぐらゐの実感にはしかにあつた。尤も、その窓があいたために、見たくもない景色まで目に入つて来るということも、ないわけではない。

「大変な景氣だと聞いて来たが、この事務所を見ると、話ほどのことはないのかな？」

相沢はそういうと、首をまわして室内を見まわした。葛も誘われるように、天井を見上げた。

曲もない白壁の天井から、古めかしい銅の飾りのついた電燈が、一つだけ下つてゐる。そして四周には、飾り棚も書類棚もない。いわば、裸のままの壁だ。主客二人の掛けゐる椅子でさえ、破れてこゝろないがすでに色あせていた。

「御覧の通りさ。葛一人の内情かくの如し。まあ、ここから見る街の景色の方が、僕の懐よりは遙かに花やかだ」

実際、銀座は夜に入つたばかりの時刻である。椅子に坐つてゐるから、目の下の通りも、向い側に並ぶ店屋も見え

ない。しかし窓の右下隅には、葛の事務所のあるビルの角から、向うへきれ込む裏通りの一部が見えている。店々の灯が、明るいネオンが、燃えている。広くもないその裏道にも人波は動きながら、ふくれ上ってゆくかのようだ。そういうえば雑踏のひびきが、マイクの声が、流れる音楽が、締め切った窓を通して、押し込んでくるようである。

「お前……子供は元氣か」

不意に、相沢が言った。それはたしかに、不意討ちだった。その証拠に、葛は花やかな町角に投げていた視線を、あわただしくひき戻された。相沢の傷痕のある顔が、ひき吊れたような笑いをうかべていた。

「子供って……俺は身寄りもない独り者だよ、この間、言っただろ」

「そりゃ、表向きの話さ」

裏も表もあるか、と、葛が言おうとした時、ドアが叩かれた。西脇順子が、銀色の盆に、コーヒーを捧げて入って来た。それを、葛と客との前へ静かに配ってから、

「みんな、先にホテルへ行ってお待ちするそうです」

「君は……」

「あたしは所長と御一緒に……」

西脇順子が部屋を出て行ってしまうと、葛は改めて訪問客の姿に目を注いだ。

——この男は、一体なにが目的で、俺の所を訪ねて来たのだろう。

はじめてこの男と向い合った人は、まずその左頬にある傷痕に、目を惹かれてしまうだろう。そしてその傷痕そのものが、この男の顔であるような錯覚を、起すにちがいない。しかし、意識して見れば、その峻しい目もとにも、とかくゆがみがちな口もとにも、覆いがたく残忍な色が流れている。着ている背広はいくらか古びて、型もくずれてしまっていた。どう見ても、余りいい生活をしている男とは見えない。するとこの男は？

年の暮である。十二月も、すでになかばを過ぎていた。

——こいつは、金がほしいのではないか？

ふとそう思うと、葛は自分の中にも、鋭い刃のようなものが、風の中の穂すすきのように、閃き立つのを感じるのだった。

「俺の話に、表も裏もあるもんか。この年になってみれば、俺だって女房や子供のある生活というものを、ふつと思いついてみることがある。大体、女というものは、結婚するまでは根なし草みたいなもんだと、俺は漠然と考えていたもんだが、男だって俺のような暮らし方をして来て見ると、やっぱり根なし草なんだな。これで子供の一人も居てくれれば、俺の物の考え方も少しは変わっていただろう」

——この男は、中学時代のクラスメイトとして俺に近づいて来て、実は、俺をゆするつもりではないのか。

とんでもないことである。

金に困っているから、助けてくれ。そういう頼みでもあ

るなら、年の瀬のことだ、胸の財布から一万円札の二、三枚ぐらいぬき出してやることに、葛は痛痒を感じない。しかし、強請^{やせ}られるのは御免である。痛くもない腹を、こんな奴にさぐられるような俺ではない。

——もう、この愚劣な応対から、放免してもらわなければならぬ。

と彼は思った。だから、いくらか口調を柔らげて、

「いや、時間があれば久しぶりに、その辺で一緒に食事をしてもいい。だが、今日はこれから結婚式があつて……。

いま、女の子が言つてただろう？ この事務所であつていた娘さんの、結婚式なんだ。これから、披露宴に行かなければならない。悪いが、時間がないから失敬するよ」

またこの近くへ来たら、寄つてくれ、と言おうとして、彼はその言葉を、危く齒の裏側で食いとめた。

「ふむ。はじめてやつて来て、俺は追い立てられて帰るわけか」

「ちよつと、日が悪かつたな」

「そうか。それじゃ、日を改めて出直すことにしよう」

そう言うのと、男は立ち上りながら、薄く微笑をうかべるらしかった。しかし、笑おうとすると、この男の頬の傷痕は、うごめく守宮^{かみきり}のように歪むのである。

——大抵の奴なら、この男の顔にある傷痕に怯えてしまふだろう。

その時、男は言つた。

「お前の言葉を聞いたら、結城簞子^{ゆづりこ}はなんと言うだろう」

「結城？」

なんの愕きもなく、相沢の口にした人の名をそのまま反響させるような口調で、葛は言つた。

「結城って、誰のことだ」

「おや、忘れたか」

「……」

しかし葛の目には、不意に何人かの女の姿がうかび上り、順々に影のように移つて行つた。この十年、十五年の間に、ある日ふと繋がりが生じ、やがて彼の目の前から消えて行つた女たちである。思い出して、微笑をうかべたくなる女がいる。憎悪の念だけを、彼の内部に刻みつけて行つた女もいる。今になつてみると、果して繋がりがあつたのかと、疑いたくなるような女もいる。一夜だけだつた女。比較的、長く続いた女。しかし、結城なにかしと名乗る女は、彼には思い当りそうもなかった。

——こいつ、いい加減な女の名前を創作して、やつぱり俺を脅迫する氣でいるな。

と思つたから、

「そんな女、俺は全然知らないよ。そりゃ、何かの勘がいだ」

「お前がそう言うなら、今日のところはそうして置こう。いつか、ひよいと思ひ出して愕くだろう」

「愕くことがあつたら、その時は、相談に乗ってもらふ

よ」

葛は、いくらか皮肉な口調になった。事務所へ続くドアを開くと、窓ぎわの机に向つていた西脇順子が、あわただしく立ち上つた。

「お客様は……？」

「お帰りだ。僕等ももうすぐ、ホテルへ行かなければなるまい」

「はう」

葛のうしろから、応接間を出て来た相沢は、

「やあ、お邪魔さま」

と、順子に声をかけて、

「また来ますからね、僕のこととは覚えて置いて下さいよ。なにしろ、葛とは中学生のころからの友達だ。といえbaumう、三十……五年にもなろうという長いつき合ひなんだから……」

「どうぞ、また……。今日はあわただしくて、申し訳ありませんでした」

出入口の扉を開いて、男を送り出す。葛はもう、その扉口に背を向けていた。

「なんだか、こわいお客様ですわ」

ドアを閉じる音がして、順子が葛の背に向つて言った。が、葛は答へなかった。古風なエレヴェイターはあるのだが、二階のことだから、男も階段を降りる氣になつたのだろう。靴音が、響いている。響きながら、降りてゆく。降

りにつれて靴音は微かになり、ある瞬間、それはふっと、葛の耳から消え去つてしまつた。

窓の下は十二月の雑踏だが、このビルの中は森閑としてゐる。時刻が時刻だから、どここの事務所ももう締まつてゐるのだろう。人の気配は、絶えてないようである。いや、このビルは眞昼でも、とかく閑散としてゐるのだった。活氣のある会社が、部屋を構へてゐるわけではない。従つて、人の出入りも多くはない。そういうビルが夜になると、死んだように静かになるのである。

「さあ、遅れないように行こう」

みぞれは、雨になつてゐた。

田村町を越えると、車はここでも道路を埋めてはゐるが、両側の町なみはいくらか暗くなつてゆく。舗道をゆく人影も、疎らである。

——なんだか、暗い夜だな。

と、葛は思った。

それは彼がさつきまで、頬に傷痕のある男と会つていたせいかもしれない。その男が、なんで突然に訪ねて来たのか分らない。ゆすりかと彼が思つたことはたしかだが、今日のところはまだ、そこまでも行つてはいなかつた。なんとなく、中途半端である。その齒切れの悪い不明瞭な何かが、やはり葛の中に一種のしこりを残したのかもしれない。かつた。

車が、通りからホテルの正面へむけてカーヴを切つた時、

「あら、きれいだ……」
と、順子が言った。

なるほどホテルの建物を、覆うようなクリスマス飾り
ついでである。正面、最上層の中央部から二階まで、ちょ
ど樅の木にかけた灯のように、幾すじかの燈火の列が流
落ちてゐる。車は、その灯の真下へ行って止った。

ホテルの中は、明るかった。着かざつた人びとが、広い
ロビイを歩いている。二人はロビイの中央にあるエスカ
レーターで、二階へ上った。ほのかな灯がつながる廊下を行
くと、高井洋子の結婚披露パーティの、受付が出来ていた
署名をする。胸に造花をつけてもらう。そのまま、控室の
方へ行こうとすると、

「葛さまでいらつしやいますか」

受付にいた若い女に、声をかけられた。

「そうです」

女は、自分の目の前に置いていた小さなメモをとり上げ
ながら、

「ただいまお電話が御座いまして……」

「どこからですか？」

「青山宝石教室、と仰有いました」

「それで……」

「生徒さんが御殿場の先で、怪我をなさつたということ
です」

「ふむ」

宝石教室の経営などというものは、彼の事業の中に入る
ほどのものではなかった。

・もともと、大地主である。土地の開発から、売買も手が
けている。貸ビル業もやっている。レストランも、ドライ
ヴ・インも、いくつかは手中にある。事務所は、それぞ
れ方々にあつた。彼が、毎日必ずそこへ顔を見せる銀座の事
務所は、そういうふうに散っている事務所の仕事を、一か
所にしぼっている所なのである。同時に、彼個人の事務所
でもあつた。

「青山宝石教室」は、青山通りから表参道を入つた左手の、
ビルの三階にあつた。彫金、鍍金、研磨などを教える小
さな学校のようなものだが、頼まれて経済的な面倒を見て
いた。いわば、その教室の持主のようなものだが、そこか
ら上る利益などというものは、余りに微々たるものだった。
そういうえは、彼にとつて宝石教室は、事業というより一
種の道楽という方が當っているであらう。

「また御連絡致しますけど、一応、御報告致します、とい
うおことづけて御座いました」

「ありがとうございます」

——それにしても今日という日は、妙に出来事の多い日
だな。

と、葛は思った。

——さっきまでは、顔にひどい傷痕のある男の、訪問を
受けていた。そして今度は、どこかで怪我人が出てい

いう。

しかし電話のことづけだけでは、実は何も分らなかった。葛は宝石教室の人たちを、幾人も知ってはいないのである。なるほど、事務をとりしきっている男は知っている。何人かの教師たちの顔も、見知ってはいた。彼等は大抵、芸大とか美術大学とかの、若い卒業生であった。しかし生徒となると、これはほとんど知らない。

彫金、鍍金、それに研磨。それらの各パートを合せて、現在、何十人の生徒がいるのか。彼等の内の一部は、暇のある人妻であるそうだ。会社につとめている、若い女の子もいる。こういう女たちは、一種の趣味としてこの教室に通って来るのである。そうかと思うと、やがては芸大の工芸へでも進みたいと思っている娘たちもいる。それに、十何人かの青年たち。

葛はその教室の近くを通りかかった時、ひよいと車を停めて、ビルの階段を登ってゆくことがあった。とはいえ、彼のそういう行為は、決してその教室の、経営状態を見ようとしてのものではなかった。彼はただ、奇妙に宝石というものが好きなのである。

もつともそういう宝石教室で、本物の宝石が扱われていることなど、余りなかった。多くはアクアマリンとかジルコンとかいう、貴石や化学的操作によって生み出される石を素材に、研磨の技術を習っている。あるいは、指環やペンダントを作っている。その上、一つの部屋を、週に二日

は研磨、二日は鍍金というように、代り合って使っているのである。だから、葛が不意に覗きに行っても、その日などの部の教室に当たっているか分らない。

更にこの教室の生徒たちは、昼の十二時から夜の九時までの間、自分の都合のいい時刻に姿を見せて、二時間でも三時間でも、好きなだけ仕事を習って帰ればいいことになっているのだ。葛が、思い出したように訪ねてゆくのは、偶然、同じ生徒に行き会う機会というものも、全く期待出来ない。従って葛の知っている生徒というものは、ほとんど居ないわけである。

すると、たとえ誰が怪我をしたところで、彼は大した痛痒も感じないですむわけだ。

「君、あとでちょっと、宝石教室へ電話をして、もう少し様子を聞いて置いてくれ」

と、廊下を歩きながら、彼は順子に言った。

「きっと、車でも飛ばしすぎたんだろう」

披露宴の控室に入ると、さすがに花やかな色彩である。五、六十人の招待客が、腰かけたり立ったりして、時間を待っている。あでやかな、訪問着の娘がいる。黒に銀糸の縫い通りのある服を着た、女がいる。

「あら、皆さんあすこにいらっしゃるわ」

・順子の指さす隅の卓子で、葛の事務所の人たちが、笑って二人を迎えていた。